小戰例評論及問題

第二編

K氏編

東京　兵事雜誌社

緒言

茲ニ本書第二編ニ關シ研究スル所アラントス此兩兵種ノ相戰フヤ先ヅ其精神ノ健全ヲ失ヒタル者必ズ敗ル故ニ歩兵ハ如何ナル場合ニ於テモ毅然トシテ停止シ信ヲ己ガ火力ニ措キ沈着シテ射撃シ以テ敵騎ヲ撃退セントヲ圖ル而シテ騎兵ノ一ビ此種ノ彈雨ニ浴スルヤ忽チ著大ノ損害ヲ蒙リ隊伍ノ擾亂ハ其志氣ヲ敗滅シ終ニ其目的タル歩兵ヲ侵襲スル能ハザルナリ故ニ騎兵ノ歩兵ヲ襲撃セントスルヤ先ヅ其勇氣ヲ奪却センヿヲ欲シ

帝國圖書館藏

或ハ其不意ニ出デ或ハ諸方向ヨリ之ヲ襲フ若シ夫レ歩兵ニシテ敵騎ニ對シ其勇氣ヲ喪失シ其火力ヲ逞ウスル能ハサランカ即チ忽チ敵騎ノ蹂躙スル所トナランノミ抑戰鬪ノ事タル精神的問題ニ屬スル亦多シト雖モ此兩兵種ノ戰鬪ヲ以テ特ニ著シト謂ハザルヲ得ズ然レモ敵ノ志氣ヲ奪ヒ我勇氣ヲ確保スル必ズヤ術ナクンバアラズ本編研究ノ主目唯是レノミ

小戰例評論及問題第二編

N K 編

第十二例

第十一例 歩兵ニ對スル騎兵襲擊

整頓セル歩兵ニ對スル騎兵ノ襲擊ガ如何ナル結果ニ終ルヘキヤハ現今火器ノ進歩ト共ニ世論殆ト一定シテ動カスヘカラス然レモ其精神上ニ及ホス影響ハ大ニ考慮セサルヘカラサルモノアリ

千八百七十年八月六日Wœrth（ヴェルト）ノ戰鬪間Morsbronn（モルスブロン）附近ニ於テ佛軍ミッシェル甲騎兵旅團（二聯隊計七中隊）及

槍騎兵第六聯隊ノ二中隊ハ勝利ヲ得テ興奮シ而モ戰鬪準備ヲ整備セル普軍歩兵ヲ襲撃シ其受ケタル損害ニ依リ其五中隊ハ殆ト殲滅ニ陥リタリ

先ツ此襲撃ニ就テ研究スル所アラントス襲撃ニ關スル記事及評論ハフォン、レットーウ、フォールベック著我士官學校譯戰史例證三十五頁幷ニ其第三第四略圖ニ殆ト正確且綿密ニ記載セリ本書ハ平易ニシテ解シ易キ良書ナルヲ以テ我軍隊到ル處ニ歡迎セラレシヲ以テ多分ハ諸君ノ文庫中ニモ存在スル事ト信スルヲ以テ此ニ參考ニ供セラレンヿヲ望ム

此日午后〇時四十五分ノ經過ニ於テ獨軍左翼ノ迂回隊(歩兵六大隊半)ハ Duerreulbach(デュエルレンバッハ)ヲ經テ前進シ其先頭部隊ハ Morsbronn(モルスブロン)附近ヲ占領シ佛軍ノ右翼第一軍團ノラルチーニユ師團ノ戰況ハ甚タ危殆ニ迫レリ故ニ將官ラルチーニユハ將官デュエスムニ其司令スル騎兵聯隊ノ一ヲシテ此ノ獨軍ノ迂回縱隊ヲ襲撃セシメンヿヲ請ヘリ

當時ミッシェル甲騎兵旅團ハ Eberbach(エーベルバッハ)東方ノ低地ニテ矮樹林ニ沿ヒ位置シ其後方ニハ尙槍騎兵第六聯隊ノ二中隊停止セリ此地點ヨリ Morsbronn(モルスブロン)方向ニ對スル地

形ハ騎兵襲撃ノ爲メ甚タ良好ナラス植物ノ栽培園、並樹、葡萄園凹道及街道兩側ノ土堤等到ル處多クノ障碍ヲ成形セリ

誤解ニ依テ將官タルチーニユノ希望ニ反シ使用シ得ヘキ新鋭ノ騎兵即チ甲騎兵第八聯隊ノ四中隊仝第九聯隊ノ三中隊(此不足ナル一中隊ハ當時輜重ノ掩護ニ從事セリ)ヨリ成ルミッシエル旅團及槍騎兵第六聯隊ノ二中隊ハ悉ク此襲撃ニ參與ス

今ヤ此等ノ騎兵ハ約千五百米ノ困難ナル地區ヲ經過シ新鋭ニシテ且優勢ナル敵軍歩兵ヲ蹂躙セントス

問題

一此襲撃ハ果シテ如何ナル成果ヲ豫期シ得ルヤ並ニ其襲撃法ニ就テ研究スヘシ

此ニ襲撃目標タル Morsbronn(モルスブロン) 附近獨軍左翼隊歩兵ノ位置ヲ記述セハ第三十二聯隊ノ第二第四中隊ハ Morsbro(モルスブロ)n 村西北方高地上ニ其第一第三中隊ハ尚 Morsbronn(モルスブロン) 村落内ニ在リ而メ第三十二聯隊ノ第二大隊ハ二個ノ半大隊トナリテ閉縮大隊ヲ成形セル第九十四聯隊ノ第二大隊及工兵第三中隊ト共ニ該村ノ西方ニ達ス第三

第十一例

十二聯隊及第九十四聯隊ノ銃兵大隊ハ Morsbronn（モルスブロン）村ノ南方ヲ前進中ニシテ第八十聯隊ノ第九第十二中隊ハ Bruchmühle（ブルッフミューレ）ヨリ該村北方入口ニ達セントス

又佛軍ニ於テハ當時監視ノ爲 Morsbronn（モルスブロン）附近ニ位置シタリシ佛軍テュルコー第三聯隊ノ二中隊ハ Eberbach（エーベルバッヘ）東南方ノ小森林ヲ占領シ獨軍攻擊線ノ左翼ヲ猛射セリ

問題

二此二中隊ノ射擊ハ佛軍騎兵襲擊ノ爲メ如何ナル價値ヲ有スルヤ

第十一例

此射擊開始後佛軍騎兵ハ直チニ其運動ヲ始ム

甲騎兵第八聯隊ハ第一線ニ前進ン其各中隊ハ中隊縱隊ノ隊形ヲ執レリ第二線ニハ甲騎兵第九聯隊前進シ其二中隊ハ横隊其一中隊ハ中隊縱隊ヲ成形セリ而シテ第二線聯隊ハ第一線聯隊ノ右方ニ梯次ス其後方ニハ槍騎兵ノ二中隊跟隨シ第二線聯隊ニ對シ更ニ右方ニ梯次セリ佛軍騎兵ハ最初敵ノ歩兵ヲ見ルヿナク唯一意ニ Morsbronn（モルスブロン）方向ニ前進セルガ其左側 Albrechthaus（アルブレヒトハウス）ヨリ既ニ敵ノ射擊ヲ蒙ムレリ

佛軍騎兵ハ速歩ヲ以テ Eberbach(エーベルバッハ) ヨリ Qunstett(グンステット) ニ通セル
凹道ヲ越エテ前進シ此ニ於テ甲騎兵第八聯隊ハ半聯
隊集團ヲ作リ將官ミッシェル其先頭ニ立テリ今ヤ Mo(モ)
rsbronn(ルスブロン) 附近ニ存在セル敵軍歩兵ヲ發見ス而シテ之ヲ
襲撃スルニハ斜面ヲ高昇セサルヘカラス甲騎兵第八
聯隊ハ其襲撃目標ヲ獨軍歩兵ノ右翼ニ甲騎兵第九聯
隊及槍騎兵ハ之ヲ其左翼ニ執リ全騎兵集團ハ猛烈ニ
進襲ス

問題

三此襲撃ニ關シ記事ト略圖トヲ對照シ左ノ各項ニ從

ヒ利害ノ關係ヲ詳述スヘシ

a 騎兵ノ歩兵ニ對スル襲撃ハ成シ得レハ側面又ハ
少クトモ諸方向ヨリ即チ襲撃目標ニ集中的ニ行
フヲ要スミッシェル騎兵團ノ襲撃ハ果シテ此要
領ニ適合セルヤ

b. ミッシェル騎兵團ハ最初殆ト一團トナリテ前進
シ敵ヲ見タル後始メテ遠心的ニ動作ヲナセリ是
レ果ノ歩兵ニ對スル襲撃法ノ要領ニ適セリト謂
フヘキカ

c. 前項ノ如ク全隊カ敵ニ直接暴露セル後始テ其襲

擊目標ヲ規定スルカ如キヿナカランニハ如何ナル手段方法ヲ執ルヘキヤ

ミッシェル旅團ノ動作ハ以テ勇氣アリト賞スヘク以テ名譽ナリト稱スヘシ然レ𪜈其得タル結果ハ到底其受ケタル損害ヲ償フニ値セス終ニ歩兵火ノ爲ニ大ナル犧牲ヲ供スルニ至レリ其歩兵火ノ前ニ退避セル狀況及其死傷悲慘ノ狀況ハ之ヲ戰史例證ニ詳記セリ而メ吾人ハ此ニ問題トメ特ニ之ヲ研究スルノ材料ヲ有セサルヲ以テ諸君ハ該書ニ就テ一讀セラレンヿヲ望ム

今ヤ第三問題ニ於テ畧此襲擊動作ノ當否ヲ評論スルヿヲ得タリト信ス然レ𪜈尚既往ニ遡リテ此不結果ノ原因ヲ探究セサルヘカラス實ニミッシェル騎兵團ノ部署及運動ハ苟モ戰術眼アル者ノ一見シテ非認スル所ナルヘシ蓋シ其要領タル毫モ歩兵ニ對スル襲擊法ノ原則ニ合セサレハナリ若シ八月六日ノ午前ニ於テ將官ミッシェル適當ニ其將校ヲ使用シ善ク其地形ヲ探究セシメタランニハ其襲擊ノ部署ヲシテ適當ナラシムルヲ得タルナルヘク且少ナクモ至大ナル地形ノ

困難ヲ避ケテ運動スルヿヲ得タルナラム此不結果ノ原因ハ顧フニ此種ノ探究ヲ忽諸ニ附セシニ在ルナラム

問題

四乘馬隊殊ニ騎兵ノ戰鬪動作ハ地形ト如何ナル關係アリヤ

五歩兵ノ騎兵ニ對スル地形ノ利用法ハ如何ナル事ヲ主眼トスヘキヤ又如何ナル價値ヲ有スルヤ

六戰鬪ノ爲地形探究ノ要領ヲ各兵種ニ就テ研究スヘシ

前述各研究ノ外予ハ騎兵襲擊ノ歩兵ノ精神上ニ及ホス影響ヲ研究スルハ歩兵及騎兵ノ爲ニ共ニ重要ナルヿナリト思惟ス而メミッシェル騎兵旅團ノ襲擊ニ際シ彼我動作ノ狀況ハ既ニ記セルカ如ク戰史例證ニ記述セル所アルカ故ニ此ニ他ノ方面即チ當日騎兵團損害ノ景況ヨリ此無形上ノ推究ヲナサントス今其損害ヲ表示セハ左ノ如シ

騎兵隊ノ名稱	兵力	損害	百分數

第十一例

第一梯隊 甲騎兵第八聯隊（四中隊）	四二〇	二〇〇	四七、六二	
第二梯隊 甲騎兵第九聯隊（三中隊）	三一五	二八六	九〇、八〇	
第三梯隊 槍騎兵第六聯隊（二中隊）	二一〇	二〇〇	九五、二四	故ニ第二及第三梯隊ハ殆ト殲滅ニ歸セリ但シ第二梯隊ノ一部及第三梯隊ノ損害中ニハ普國騎兵トノ衝突ニ依テ起リタル僅少ノ損害ヲ含有ス
備考				

此ニ表示セル數字ヨリ推定スヘキ研究ノ全文ヲ掲載スルハ却テ興味少ナキヲ以テ之ヲ問題トシテ研究セントス

第十一例

問題

七 第一梯隊ハ何故ニ損害ノ少ナカリシヤ必スヤ其不意ノ出現カ敵ノ歩兵ノ精神上ニ影響ヲ與ヘタルヿ多キニ原因セリト考フ如何

果シテ然ラハ如何ナル影響ニシテ何故ニ損害ノ微少ヲ釀セルヤ

八 第二梯隊及第三梯隊ハ何故被害多カリシヤ是レ蓋シ第一梯隊ノ前進セル時ヨリモ比較的沈着ナル歩兵

火ヲ蒙ムレルカ故ナリト考フ如何

果ノ然ラハ何故沈着ナル歩兵火ヲ蒙ムレルヤ

第十一例

此答解ノ參考トシテ普軍歩兵第三十二聯隊ノ第六第七中隊ノ襲撃ニ應シタル動作ノ狀態ヲ記述セントス

最初此半大隊ニ向ヒ敵ヲ壓倒セントシテ襲來セル甲騎兵二中隊ノ影響ハ此獨軍歩兵ノ二中隊ニ全ク眞面目ナル擾亂ヲ惹起スルニ至レリ然レ𪜈大尉フォン、ロイクヴェスノ力ニ依リ速ニ此擾亂ヲ恢復スルヲ得而シテ此半大隊及第三十二聯隊ノ第二、第四中隊ノ急射

第十一例

撃ニ依リ敵騎ヲシテ一部ハ退却セシメ一部ハ我兵ヲ避ケテ馳走セシムルヿヲ得タリ

問題

七 敵歩兵ヲシテ絶エス此ノ如キ擾亂ヲ持續セシメント欲セハ騎兵襲撃ハ單ニ一方向ヨリスヘキヤ又ハ諸方向ヨリスヘキヤ

八 此戰例ノ經過ハ歩兵ニ對スル騎兵ノ襲撃法原則ヲ如何ニ證明スルヤ

千八百七十年九月一日Sedan（セダン）附近ノ佛軍騎兵ノ襲撃ニ

關シ獨國少佐クンツ氏ノ評論ハ此際大ニ參考ニ資スヘキモノアリ故ニ此ニ之ヲ抄譯シ其間必要ナル註解ヲ施ス所アラントス

註襲擊當時狀況ノ大要　九月一日Sedan北方Eloi ng ノ東南Bois de le Garenne森林及Cazal村附近ノ高地ニ北面シテ陣地ヲ占領セル佛ノ第七軍團ハ午后一時ノ經過ニ於テ北方即チ右翼Illy及正面殊ニ西方即チ左翼Floing方面ヨリ猛烈ナル獨軍步兵ノ逼迫ヲ受ケ且普軍砲兵ノ猛烈ナル掃射ヲ受ク將官ドーエー其步兵豫備隊ヲ他方面ニ使用シ

タルカ故ニ佛軍左翼ニ於ケル步兵隊ノ抵抗力ヲ支持スルカ爲ニハ再ヒ其騎兵ヲ犧牲ニ供セサルヲ得サリキ乃チ中央ニアリシ將官マルグリット ノ騎兵師團(輕騎兵五聯隊ヲ有ス)及ボンヌマン騎兵師團ノ甲騎兵數中隊ハBois de la Garenne森林ヨリ出テヽ左翼ニ向テ運動ス將官マルグリット先ツ銃創ヲ負テ死シ各部隊ハ襲擊ニ從事セルモ終ニ良結果ヲ收ムル能ハス唯僅カニ獨軍散兵線ノ若干部分ヲ突破スルヲ得タルノミ

曰ク吾人ハ地形ノ此騎兵襲擊ニ一大困難ヲ與ヘタル

ヿヲ認ムト雖ドモ吾人ハ亦普國歩兵ノ此大襲撃ノ時期ニ到ル迄ニ既ニ甚シク疲勞セルヿヲ忘ルヽヲ得ス此日獨軍各部隊ハ甚タ早ク其歩兵第三十二聯隊ハ夜ノ二時歩兵第四十六聯隊ノ如キハ夜ノ一時四十五分ノ頃ニ出發セリ而テ其出發前僅カニ咖琲ヲ喫スルヲ得タルノミニシテ其後日沒ニ至ル迄毫末ノ給養ヲモ受クルヿ能ハサリシナリ故ニ此大騎兵襲撃ノ時期ニ至ル迄ニハ歩兵ハ已ニ優ニ十一時間ノ勞働ヲナシ各兵ハ飢渇ト其偉大ナル勞力ノ爲ニ著シク疲勞セリ狀況此ノ如キカ故ニ騎兵襲撃ノ爲ニハ正サニ幸福ナル一

時機タルヲ失ハサルナリ若シ此普軍歩兵ヲシテ戰勝ノ後ノ兵タラシメスシテ敗後ノ歩兵タラシメハ佛軍ノ騎兵襲撃ハ蓋シ偉功ヲ奏シタルナラム

其他ノ情況ハ凡テ佛軍騎兵ニ不利ナリキ抑騎兵襲撃ハ長大ナル散兵線及其後方ニ隨ヘル小援隊ノ側面ニ對シテ執行セハ常ニ善良ナル結果ヲ得ヘキモノナリ然レ𪜈此ニ佛軍ノ爲メ全ク其利ヲ欠ケリ何トナレハ普軍歩兵ノ左翼ハ概ヲ之ヲ攻撃スル能ハス是レ午后一時ノ頃イルリー村ハ歩兵第八十二聯隊ノ五中隊及歩兵第八十七聯隊ノ三中隊合計八中隊ヨリ占領セラレ該

村南方附近一帶ノ地ハ全ク普軍砲兵ノ掃射シ得ヘキ地域タルヲ以テナリ故ニ佛軍ハ此方面ニ於テ其騎兵ヲ以テスル側面攻撃ハ全ク之ヲ企圖スル能ハス

佛軍騎兵ノ爲メ普軍歩兵右翼ニ關スル狀況ハ前者ニ比シテ更ニ良好ナラス此方面ニ於ケル地形ハ全ク側面加働ヲ妨害ス唯佛軍騎兵ハ Gaulier(ゴーリエー) ヨリ普兵ノ左側ヲ衝クヲ得ヘシ吾人ハ佛軍甲騎兵ノ之ヲ試ミタルモ終ニ不幸ナル結果ニ終ハリタルヲ見タリ

故ニ騎兵ノ戰勝ノ歩兵ヲ襲撃シテ成効ノ見込ヲ有スル所謂歩兵ニ對スル騎兵襲撃唯一ノ方式ハ佛軍ノ爲メ全ク之ヲ利用スル能ハス而メ佛軍騎兵ハ終ニ純粹ノ正面攻撃ヲ爲サヽルヲ得サリキ抑此正面襲撃タルヤ優勢ニメ善良ニ教育セラレタル而モ戰勝ノ歩兵ニ對シテハ全ク例外ニ幸福ナル場合ニ於テノミ成効スヘキモノタルヿハ戰史ノ明カニ教示スル所ナリ

（八月十六日ブレドウノ騎兵襲撃）

註ブレドウノ騎兵襲撃　千八百七十年八月十六日獨ノ第三軍團ハ佛將バゼーヌノ指揮下ニ在ル全ライン軍五軍團）ニ對シ右翼 St.Arnould(サンタルヌール) 森林ヨリ左翼 Vionville(ビオンビール) ニ亘ル線ヲ占領ス

第三軍團長フオンアルヴェンスレーベンハ佛軍ノ意志退却ニ在ルヲ想ヒ獨力之ニ向ヒ攻擊ヲ始メシモ佛軍ノ兵力ハ意想外ニ强大ニシテ却テ其逆擊スル所トナリ此孤立軍團ノ危殆ナル累卵モ啻ナラズ軍團長乃チブレドウ騎兵旅團ニ囑スルニ前進シ來ル敵ニ向ヒ襲擊シ以テ此危機ヲ救ハンヿヲ以テス

少將ブレドウ乃チ其旅團（騎兵五中隊半）ヲ提ゲ Tronville（トロンビール）西北ノ畑地ヲ發シ巧ニ地形ヲ利用シ Vion（ビオン）Vionville（ヴィオンビル）東北低地ヲ經テ敵ニ向ヒ前進ス此間

le（ル）西側高地ニ在ル獨軍砲兵六中隊ハ猛烈ナル射擊ヲ以テ騎兵突擊ヲ準備ス

騎兵旅團ノ低地ヲ出テヽ東進スルヤ近ク敵ノ步砲兵火ヲ受ケ被害甚シキニモ拘ハラズ第一線ニ在ル步兵ヲ突破シ次ニ砲兵線ヲ貫キ駕馬諸器具ヲ粉碎シ更ニ步兵ノ第二線ヲ破リ Rezonville（ルゾンヴィール）附近ニ達セル時該村附近ニアリタル佛軍騎兵約八聯隊ノ逆襲ヲ受ケ乃チブレドウ騎兵旅團ハ退路ヲ Flavigny（フラヴィニー）方向ニ求メ其西南ニ殘兵ヲ集合スルヲ得タリ（士官學校戰術學敎程附錄戰例卷一、六十一頁

參照)

此騎兵旅團襲擊ノ効果左ノ如シ

a. 獨軍ニ非常ナル不便ヲ與ヘシ佛第六軍團ノ全砲兵ヲ沈默セシメ且此砲兵七中隊ニ將校八名下士卒百五十四名ノ損傷ヲ與ヘタリ

b. Vionville(ビオンビール)北方方面ニアル佛ノ歩兵ヲ蹂躙シテ紊亂奔竄セシメ此日再ビ攻勢ヲ取ル能ハザラシメタリ

c. 最後ニ殆ド四倍強優勢ナル佛ノ騎兵ニ對シ將校二十三名下士卒百六十三名ヲ失ハシメタリ

(騎兵戰術論五十七頁參照)

襲擊準備ニ關シテハ午前ニ於ケル第一ノ襲擊ヨリモ稍善良ナルモノアリ下級指揮官モ概シテ其爲スベキ所ヲ知リ善良ニ動作セリ

註午前ニ於ウル第一ノ襲擊　此日午前九時四十五分ノ經過ニ於テ佛軍砲兵ハ既ニ偉大ノ損害ヲ受ケ普軍砲兵ノ射彈ハ佛軍第七軍團ノ右翼 Calvaire(カルヴェール) d'Ally(ドアイリー) 附近ニ停止セル將官マルグェリット騎兵師團ニ及ブ將官マルグェリット大ニ憤リ直ニ其指揮スル騎兵五聯隊ヲ放チ各個ニ普軍砲兵ヲ

襲撃セシム然レ𪜈普軍砲兵及歩兵ノ妨害ニ遇ヒ充分ナル結果ヲ收ムル能ハス蓋シ其襲撃準備周到ヲ欠キ運動方向モ亦甚正確ナラス且將官マルグェリットノ指揮徒ニ血氣ニ趨リ下級指揮官互ニ其意圖ヲ熟知セサリシカ如シ

然レ𪜈襲撃ノ指揮ニ關シテハ實ニ評スベキ限リニアラス佛軍高等指揮官ノ位置ハ既ニ三回ノ交迭ヲ見タリ即チマクマホン元帥ニ次デ將官ヂュクロー之ニ代ハリ尋デ將官フォンウィムベン其位置ヲ領襲シ其處置タル凡テ將官ヂュクローノ希望ニ反セリ佛軍ノ此

大騎兵團ニ與ヘラルヽ命令ハ常ニ一途ニ出デズ而シテ亦此騎兵團ヲ一將官ノ指揮ニ委スベキ計畫ノ企テラレタルコトアルヲ聞カザリシナリ其他決戰ノ時機ニ臨ミ將官マルグェリットノ戰死セルハ一大不幸ナリシナリ將官ノ死後ニ於ケル騎兵師團ノ處置ハ數多ノ將官即チ將官ヂュクロー、將官ドーエー及將官ドザリニヤック、フェヂロン等ノ干渉スル所トナリ終ニ此騎兵師團ノ各部ハ各個ニ普軍ニ進襲ス然レ𪜈徒ラニ其急射撃ノ撃破スル所トナレリ

註マルグェリットノ死後其騎兵師團指揮ノ紊亂ハ

今更ニ此ニ詳說スルノ要ナシ唯此師團襲擊分離ノ狀況ヲ紹介センガ爲メ各襲擊團ノ編成ヲ示サントス即左ノ如シ

一、槍騎兵第四聯隊ノ第二、第四中隊ノ襲擊

二、亞弗利加獵騎兵第一聯隊ノ第三第四中隊及驃騎兵第一聯隊ノ第一、第二、第三中隊ノ襲擊

三、亞弗利加獵騎兵第三聯隊第一第二中隊ノ襲擊

四、亞弗利加獵騎兵第一聯隊ノ第五第六中隊及驃騎兵第一聯隊ノ第五第六中隊ノ襲擊

五、亞弗利加獵騎兵第四聯隊ノ午前ニ於ケル襲擊

ノ殘餘ナル二中隊半ノ襲擊

六、獵騎兵第六聯隊ノ第一第二中隊ノ襲擊

七、仝第六聯隊ノ第三第四中隊ノ襲擊

八、亞弗利加獵騎兵第三聯隊ノ第三第六中隊ノ襲擊

此八團ノ襲擊ハ各別ニ毫モ連繫スル所ナク執行セラレ約三十分間連續ス各襲擊ハ普軍歩兵ノ急射擊ノ爲ニ各個ニ擊破セラレ後發ノ騎兵團ハ前者ノ轍ヲ蹈ミテ徒ニ死傷ヲ繰リ返ヘセルノミ

其他襲擊地ノ地幅狹小ナリシカ故ニ大騎兵團ヲ仝時

ニ運用シ又ハ之ヲ斜梯形ニ區分シテ進襲スル等共ニ充分之ヲナス能ハサリシナラム然レモ吾人ハ當時ノ指揮ヲシテ少ク巧妙ニ且整齊ナラシメナハ各梯隊ノ兵力ヲシテ其當時ニ於ケルヨリモ二倍若クハ三倍ナラシムルヲ得タルナラムト信ス果シテ然ラハ比較的良好ノ功果ヲ奏シ得タルナラム

Ilty(イルツー)及Floing(フロヴン)間ノ午后一時ニ於ケル普軍全歩兵ヲ斬撃セシ「ハ到底期望シ得ヘキニアラス是レ當時優勢ノ歩兵既ニ到達シアリシヲ以テナリ然レモ多數ノ散兵線及小援隊ノ斬撃ハ決テ期望シ得ヘカラサル「ニア

ラス然ルニ終ニ亦之ヲモナス「能ハサリシ所以ノモノハ全ク騎兵襲撃指揮ノ統一ヲ欠キタルニ原因セスシハアラス而シテ誰カ此種ノ指揮統一ヲ以テ不要事ナリト主張スルモノランヤ

是ニ依テ之ヲ觀レハ勇敢ナル佛軍騎兵ニ大困難ヲ與ヘタルモノハ地形、戰況、指揮ノ不統一、及諸將官ノ干渉ナリト言フヲ得ヘシ

然レモ實際ニ於テハ數多ノ散兵線ノ撃破セラレタルアルノミナラス驃騎兵ノ一部ハSt. Albert(サンタルベール)附近即チ戰鬪部隊ノ遠ク背後ニ到達セリ是レ研究スヘキ材料ナ

ラスヤ

當時普軍歩兵ハ其隊伍既ニ混淆シ而モ彼我兩軍ヲ包メル硝烟及濃密ナル塵雲ノ間ニ在リテ互ニ亂射セルノ事實ハ殆ト確實ナリト明言スルヲ憚カラサルナリ諸方側ヨリ進襲シ來レル佛軍騎兵ヲ射撃センカ爲ニハ多クノ部隊ハ轉回ヲナサヽルヲ得サリキ而シテ此際友軍戰友ノ長鉛彈ニ依リテ其死ヲ致セル多數ノ普兵アリシヿハ此大戰場騷亂ノ間ニ戰士トシテ從事セル者ノ毫モ爭ハサル所ナリ

未來ニ於テハ硝烟ニ關シテ更ニ言ヲ須ヰルノ要ナカラムト雖モ塵烟ノ以テ展望ヲ全ク阻絶スルニ足ルヘキヿハ深ク記臆スヘキヿトス故ニ予輩ハ嘗テ予輩ノ鋭敏ナル眼目ニ映シタル此等悲慘ノ影像ハ恐ラクハ未來ニ於テモ亦再ヒ演出セラルヘキヿヲ信スルナリ

予輩ハ千八百七十年九月一日 Floing(フロワン) 及 Cazal ノ高地ニ於テ佛軍騎兵ノ演出シタル劍電血雨ノ慘劇ヨリ如何ナル戰術上ノ結論ヲ得ヘキカ

前記ノ結果ハ果シテ歩兵ニ對スル騎兵襲撃ノ望ミナキ事ヲ證明スルニ足ル乎若シ之ヲ絶望ナリト論斷ス

ルモノアランカ予輩ハ此種ノ論者ニ次ノ如ク提言セントス曰ク最近百年間ノ戰史ヲ正確且熱心ニ研究セヨ是レ歩兵ニ對スル騎兵襲撃ノ成果ヲ疑フ者ニ對シ其疑惑ヲ解クノ最良方便ナリト然レ𪜈騎兵ノ成果ハ殆ト常ニ敗餘ノ歩兵ニ係ルモノニシテ殆ト戰勝ノ歩兵ニ關スルモノアラサリキ是レ全問題ノ主要點ナリトス

未來ニ於テモ尚ホ其騎兵集團ヲ以テ戰勝ノ歩兵ヲ撃破シ之ヲ斬撃セントス希望スルカ如キ樂天家アランカ苟モ教育アル軍人ノ嘲笑ヲ禁スル能ハサル所ナラム

然レ𪜈騎兵ハ決テ成効ノ希望ヲ以テ歩兵ヲ襲撃スル能ハスト信スルカ如キ神經家アランカ教育アル軍人ハ之ニ向テ忽チ非認ノ聲ヲ揚ケントス

試ニ千八百七十年九月一日午后一時頃佛軍ニ新鋭ナル歩兵一師團アリテ Floing（フロワン）ノ高地ニ出現シ普軍歩兵ノ全散兵線及援隊ニ對シテ有利ノ逆襲ヲ試ミ之ニ偉大ノ損害ヲ附與シ之ヲ此高地ヨリ撃退シ得タルモノト假定セヨ然ル時ハ勿論已ニ殆ト其將校ノ全數ヲ奪ハレタル此普軍歩兵集團ハ Floing（フロワン）川ノ掩蔽ナキ谷地ヲ退却スルニ際シ佛軍ノ猛烈ナル追撃射撃ヲ受クヘ

キヲ以テ再ヒ掩蔽物ヲ得ンカ爲自然急速ナル歩度ヲ執ルナラム而シテ此時忽然佛軍騎兵集團ノ出現スルアリテ昏亂セル此普軍歩兵群ニ對シ席捲シツヽ一途ノ指揮ト確實ナル計畫ニ從ヒ盲目的ナラサル襲擊ヲ加ヘ得タリトスレハ如何尙且ツ集中射擊ヲ蒙ムリタル佛軍砲兵ニ代フルニ尙大ニ用ユヘキ一砲兵集團アリテ彼ノ高地上ニ在リテ退却セル歩兵群ヲ、シテ寸毫モ停止スルヲ得セラシムルヲ得タリト假定セヨ此等ノ情況ニ於ケル騎兵襲擊ノ結果ノ全ク相異ナルヘキハ誰レカ亦之ヲ爭フ者アランヤ

故ニ友軍ノ歩兵及砲兵ノ勝利ハ其騎兵ニ名譽ノ桂冠ヲ獲セシムヘキ進路ヲ開ク者ニシテ之ニ反シ歩兵及砲兵ノ敗績ハ其騎兵ニ千八百七十年九月一日ニ於テ生起セルカ如ク決テ勝利ヲ爭フヘキ目的ナキモ唯僅少ノ結果ヲ獲ルニ滿足シテ敢テ死力ヲ竭シ自ラ犧牲タルヘキ時機ヲ與ヘルモノナリ是レ予輩ノ Sedan（セダン）附近ニ於ケル有名ナル騎兵襲擊ノ觀察ナリトス

予輩ハ尙未來ノ騎兵襲擊ノ指針タルヘキ一ノ注意ヲ提供セントス當時苟モ確乎トシテ停止セル普國歩兵中隊ノ前面ニ於テハ佛軍騎兵ノ死傷人馬ヲ以テ一ノ

堤防ヲ成形スルニ至レリ故ニ佛軍騎兵梯隊ノ一ニシテ其前梯隊ノ既ニ到達セント試ミタル目標ト同一若クハ之ニ近邇セル目標ニ向テ進擊セルモノハ途中ニ於テ前梯隊中ノ擊退セラレタル集團ト衝突シ而メ幸ニ之ヲ通過セリトスルモ尙又人馬ノ死屍ヲ以テ成レル堤防ニ衝突シ之カ爲メ馬匹ハ發火セル歩兵ニ沿テ側方ニ狂奔シ茲ニ全ク偉大ナル損害ヲ蒙ムレリ

此ニ依テ吾人ハ後續梯隊ノ前梯隊ノ既ニ執リタルモ例ノ執是ノルニト利一進路襲レシ例ヲス不同テハ進テ既ニ供セラレタル重大ナル我犧牲ノ爲ニ却テ各梯隊ノ

能力ヲシテ疑問ニ付セシムルノ患アリ故ニ此ノ如キ部署ハ其本來ニ於テ妥當ヲ缺クモノト結論スルヲ得ヘキカ如シ此事タル甚タ單一ナルカ如キモ佛軍ニ於テハ毫モ此點ニ顧慮セラルル所ナカリキ故ニ此事實ニ關シ特ニ注意ヲ喚起スルハ敢テ冗事ニアラスシテ將來惡ムヘキ慘劇ノ再演ヲ戒ムルニ必要ナリト信スルナリ

編者ハ先キニ戰例トシテ Woerth（ヴェルト）ノ戰鬪ニ於ケルミッシェル旅團ノ襲擊ヲ評論シ之ニクシッ氏ノ Sedan（セダン）ニ於

ケル騎兵襲擊ノ評論ヲ加味シ且必要ナル註解ヲ加ヘ其間挿入セル問題トハ互ニ對照シテ以テ略緒言ノ目的ヲ達シタリト考フト雖モ茲ニ暫ク讀者ト共ニ餘談ヲ樂ムヲ得セシメヨ

一、千八百九十六年魯國制定ノ騎兵操典第六敎攻擊ノ部總則ノ要旨ヲ摘示セハ左ノ如シ(騎兵戰術論七十一頁)

a、攻擊ハ成シ得ル限リ不意ニ出テサルベカラス且勇氣ト單純ナル手段ヲ以テ導クヲ要ス

b、敵ノ隊形ノ最モ薄弱ナル點即チ其側面及背面ニ

出ツヘシ

魯國カ現今騎兵戰ニ主用スル原則此ノ如シ是レ固ヨリ嶄新ノモノニアラスト雖モ吾人ハ之ヲ戰史ニ鑑ミテ大ニ味アルノ文字ナルヲ覺ユルナリ

二、優勢ニシテ精神ノ確乎タル歩兵ニ對シ正面ヨリ騎兵襲擊ヲ加ヘ敵歩兵ヲ殲滅シ全然勝利ヲ制セントス欲スルハ到底僥倖ヲ期スルノ外望ムヘカラサルニ屬ス然レ𪜈世人尙ホ此希望ヲ斷念スル能ハスシテ孜々研究推理ノ結果ハ往々ニシテ描虎而類猫的ノ奇策ノ按出セラルヽヲ見ル諸君ハ偖行社記事第

二百六十八號所載ノ「騎兵ノ歩兵ヲ攻擊スル方法如何」テウゾルヂーニン氏ノ論說ヲ一讀シ其所說ノ可能事タルヤ否ヤヲ論究スヘシ大ニ得ル所アラントス

三、偖行社記事第二百七十號ニハ前項記載ノゾルヂーニン氏ノ所論ニ對シエル、デ、ウィット氏ノ駁論ヲ揭ケタリ予ハ亦諸君ニ一讀ノ價値アルヿヲ紹介ス諸君ハ此二說ヲ讀了シ何レノ所說ニ同意セラルヽヤ將タ又別ニ說アリヤ

四、偖行社記事第二百七十一號八十四頁ニ絶東ニ於ケ

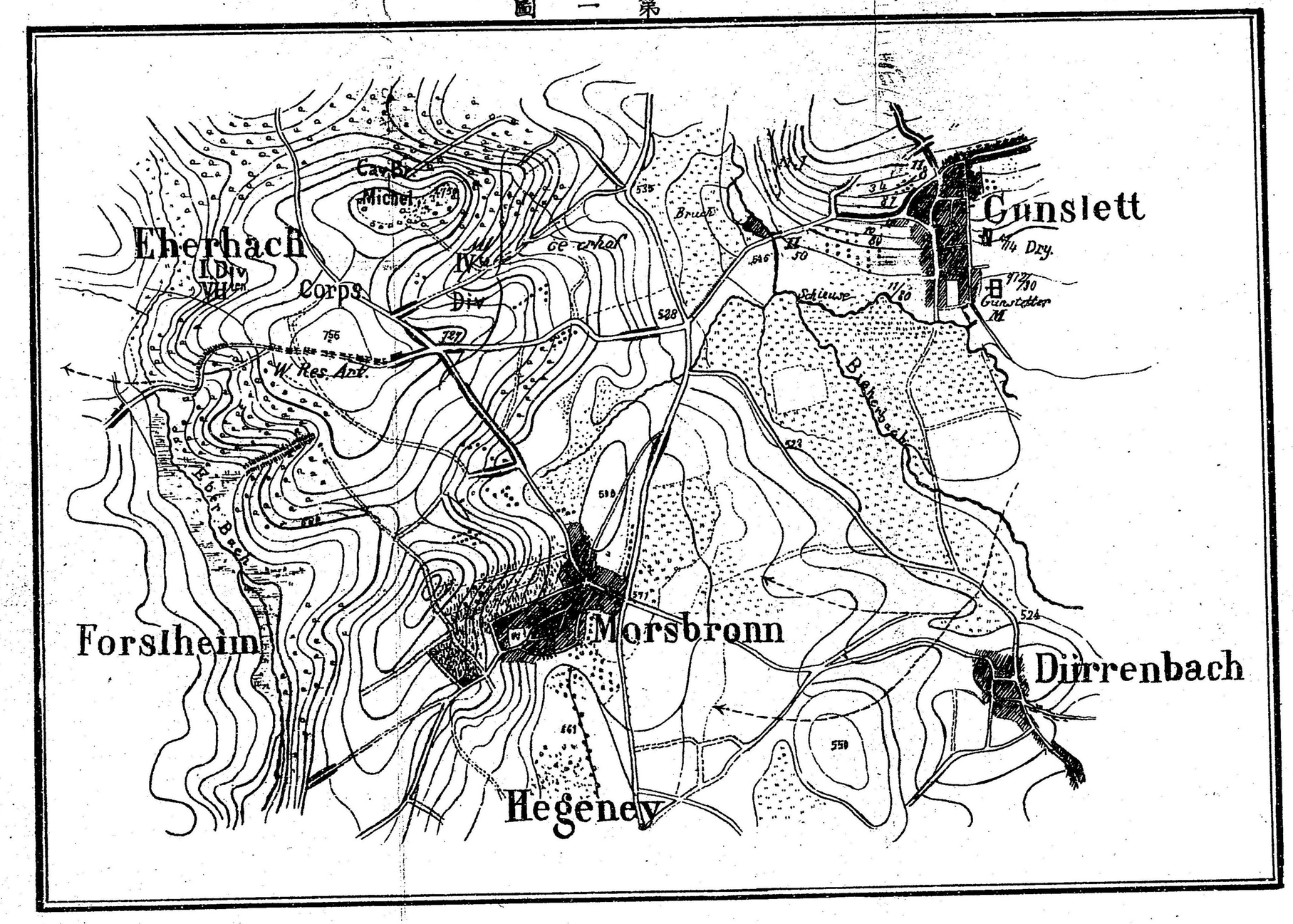
ル露國乘馬單位ニ關シ記シテ曰ク露國人ハ最近ノ清國事件ノ經驗ニ依リ支那ニ於テハ許多ノ騎兵ヲ有スルノ必要ナルヿヲ知レリ過般ノ役支那正式兵及拳徒ハ敵歩兵カ四百乃至五百米突ノ處マテ近接スルトキハ一般ニ逃走シタルヲ以テ是非之ヲ追擊スルヲ要シタリ之ヲ追擊スルニハ騎兵ニ依ルノ外方法アルヿナシ故ニ東部西比利亞ノ狙擊聯隊ノ搜兵枝隊ヲハ此度乘馬枝隊ニ變更セリ將官「レンチンカンプ」氏ノ報告ニ依レハ十二月一日滿州ニ於テ施行シタル戰鬪中ニ於テ此種ノ乘馬兵ハ至大ノ功ヲ

第十一例

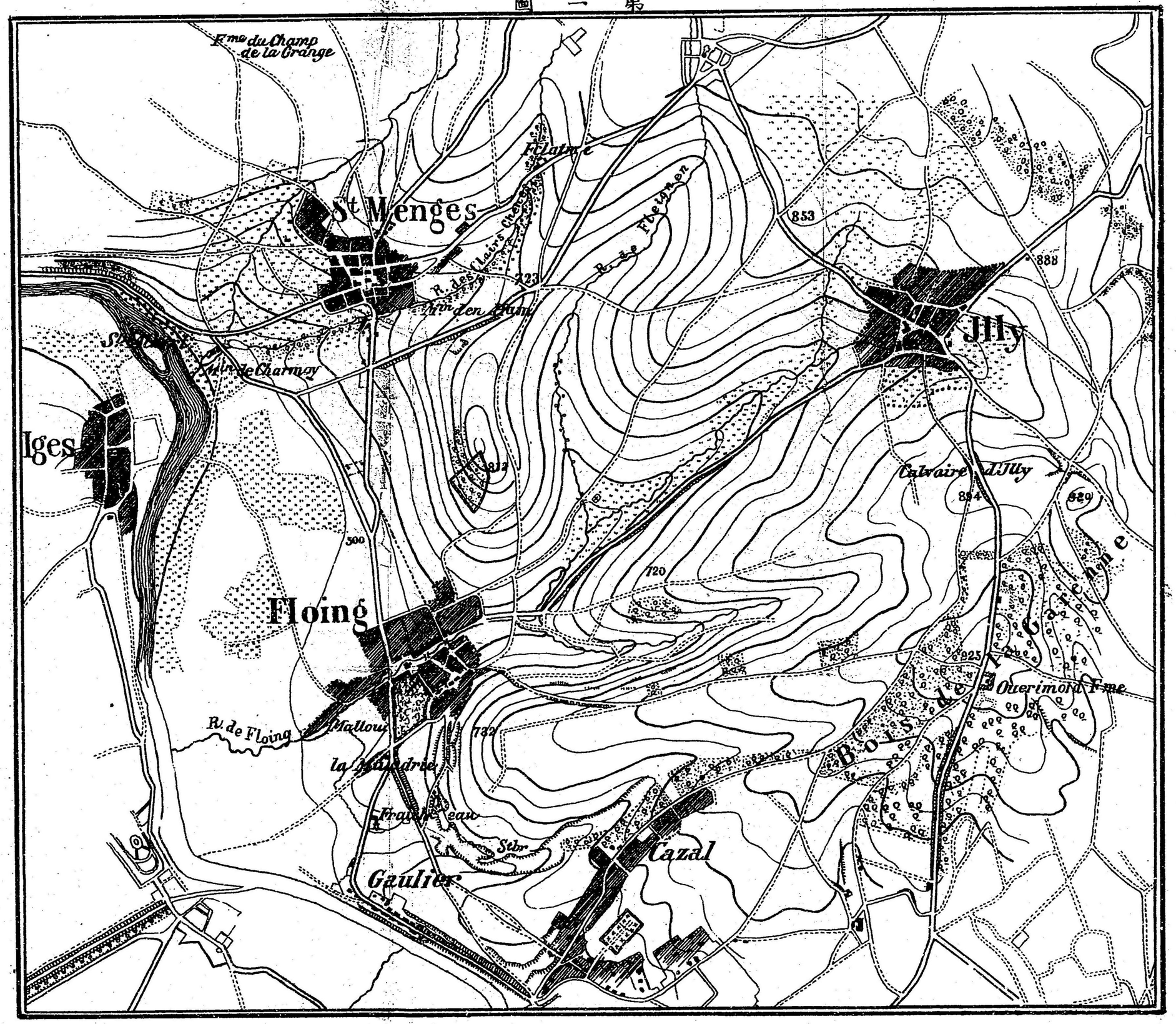
奏シタリト

此單簡ナル記事ニ依ルモ吾人ハ益々戰況及敵兵ノ種類如何ニ由リテハ歩兵ニ對スル騎兵攻擊ニ偉大ノ希望ヲ囑スルヲ得ヘキヿヲ確信スルモノナリ然レ𪜈完全ナル騎兵ト雖モ猶其効程ノ薄弱ヲ感シツツアル今日ニ於テ乘馬歩兵ノ種類ニ屬スル此種ノ魯國乘馬枝隊カ敎育アル軍隊ニ對シ果ノ如何ナル價値ヲ有スルヤハ此ニ疑ヲ存スル所ナリ

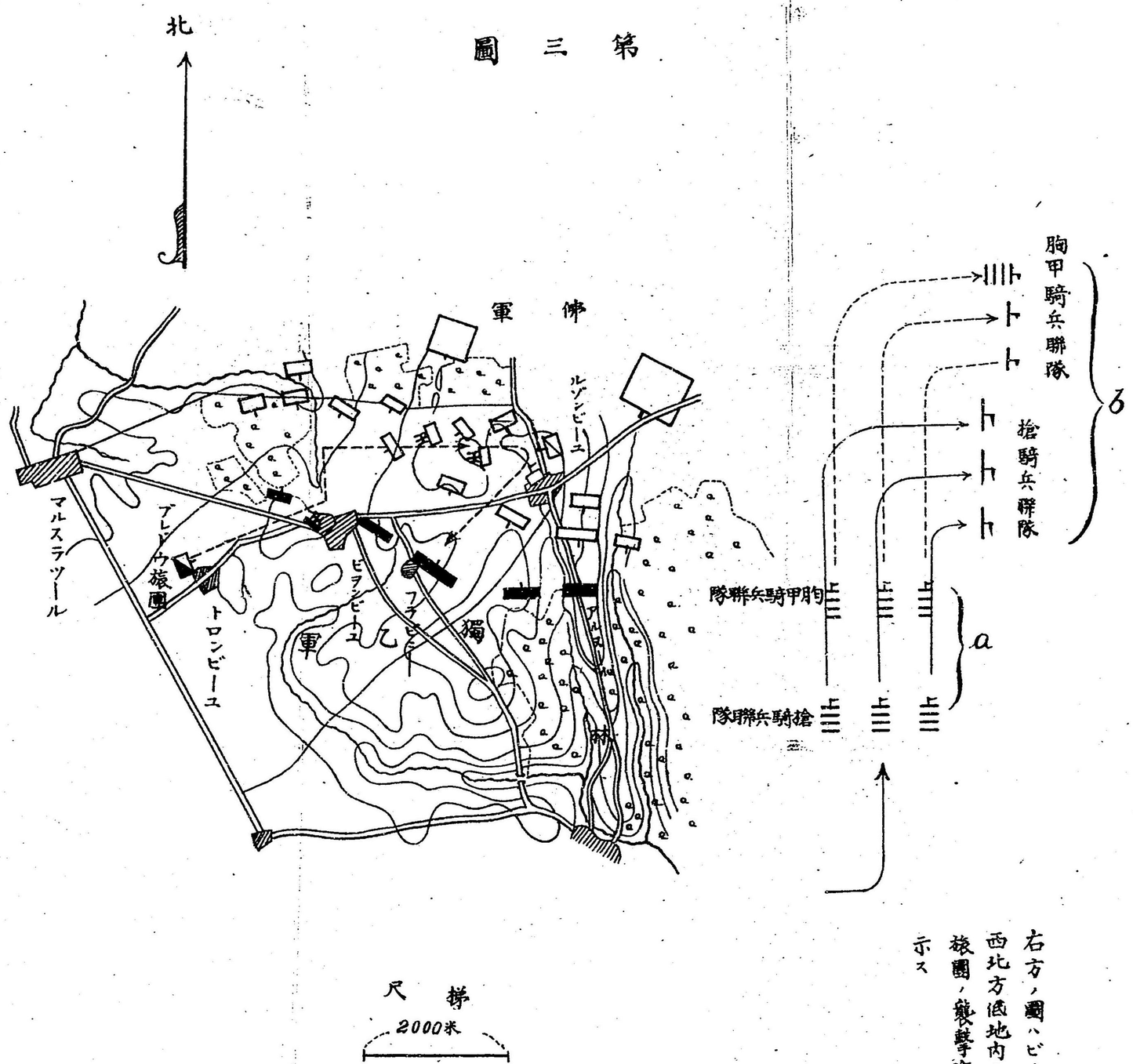
第一圖


Eberbach
I Div
VII Corps
Cav. Br.
Michel
IV Div
W. Res. Art.
Eber Bach
Forstheim
Morsbronn
Hegeney
Dirrenbach
Gunslett
Gunstetter M.
Schleuse
Brush
Blaiserbach
535
546
528
523
524
550
756
727
661

第二圖


Fme du Champ de la Grange
St Menges
R. des Clairs Chemins
Flatme
R. de Fleigneu
853
888
723
Jlly
Calvaire d'Jlly
894
820
812
500
720
Iges
Floing
825
Ouerimont Fme
Bois de la Gatenne
R. de Floing
Mallou
732
la Maladrie
Fraiche eau
Stbr
Cazal
Gaulier

第三圖



右方ノ圖ハビヲンビーユ西北方低地内ニ於ケル騎兵旅團ノ襲撃準備運動ヲ示ス

明治三十四年十月十五日印刷
同　十月十八日發行

著作權所有

發行兼編輯人　東京市赤坂區表町二丁目一番地　伊藤芳松
印刷人　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　青木弘
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所　東京市赤坂區表町二丁目一番地　兵事雜誌社

參謀本部次長陸軍中將寺內正毅閣下題字
參謀本部部員兼陸軍大學校兵學教官 陸軍歩兵少佐竹島音次郎殿校正
參謀本部出仕陸軍歩兵大尉佐藤安之助殿譯

最新 獨逸野外要務令

本書は本邦野外要務令改正後發布に係る獨逸帝國現行の野外要務令を飜譯せる者也。

帝國の野外要務令は基準を獨逸に採りて制定せしものなり從て本書の如き最新の原書を飜譯せしものは帝國の要務令と共に研究上最も必要なり縱令、原書を解するものと雖も兵書飜譯の模範となり亦原書と譯本とを對讀するときは學習上の良師たるを得べし故に本書は啻に兵家の寶典たるのみならず語學の良師として軍國の爲め至大の貢献をなすものといふべし

本書に英獨佛の語學に長し且つ文學の才美に富める佐藤大尉の成稿に屬し加ふるに竹島少佐が原書に對照し一字一句、半點片圈の微に至るまで其の英氣煥發、見地卓勵の眼界に收め嚴正綿密の檢閲を與へられ爲めに版を改むること數回特に附圖の如きは形容彩色、工夫幾番、具に苦心を重ね以て文明列强に對し遜色なからんことを勉めたるものなり。

本書の由來已に此の如し世の清新の知識を養ひ苟くも時代の進歩に先んぜんと欲する者は須らく一本を備ふべし時は人を待たず今や一日も躊躇するを許さゞるなり。

發行所 東京市赤坂區表町二丁目一番地 **兵事雜誌社**

A B 氏 著

基本戰術研究錄 附圖 全

本書は各兵操典及野外要務令の原則と戰術の原理に基き基本戰術の學理の應用とを說述せしものなり。

其と體裁は支隊の戰況を畫き問題を設け答解を與へ問答を加へ說明を附し論證を立、叙事明晰、論說正確、讀んで飽くを知らず時の移

体裁四六判上等舶來洋紙表裝本社の新工風になる上等裂地表紙
定價 一冊 金二十五錢
郵稅 金四錢

るを覺えず殆んど勞せずして戰術の堂に上るを得せしめ特に兵器の進歩を顧みて最近の戰術に論及し別に當今兵家の研究すべき夜戰の一篇を添へしは所謂『錦上の花』といふべし。

故に一たび本書を繙くときは居ながらにして學識豐富、才幹卓越、指導親切なる兵家の鞭下に在つて明快なる指導に接するを得るや必せり。

著者は公に署するを許さゞるも其の伎倆、位地及出身に關しては本書の價値と共に窃に畏敬尊信して本社の光榮とする所なり。

本社は有益なる本書を刊行せしは兵學の進歩を世界に表白する一端にして軍國の光華たるに耻ぢざるを喜び併て本社多年の唱道に背かざる忠實の學たるを信して疑はず。若夫戰術上、明確なる根底を培養し清新なる知識を吸收せんと欲する者は速に一本を座右に備へよ。

◉發行所　東京市赤阪區表町二丁目一番地　兵事雜誌社

兵事雜誌社出版畧目

『兵事雜誌』毎月二回八日、廿三日定期發行定價一冊　郵稅共金七錢

『軍人普通學講義錄』毎月一回發行規則書は郵稅二錢御送附あらば送呈す

下士の職責　（定價金十五錢　郵稅金二錢）

第十三版　在鄉下士、卒補充兵心得　（定價三錢五厘　郵稅金二錢）

第三版　在鄉下士卒教科書　（定價金五錢　郵稅金二錢）

第三版　在鄉將校心得　（定價金五錢　郵稅金二錢）

漕艇案內　（定價郵稅共金十七錢）

軍隊生活　（定價金十三錢　郵稅壹錢五厘）

海軍生活　（定價金十五錢　郵稅金二錢）

戰爭と外交　（定價金二十錢　郵稅金二錢）

兵營日記　牛の卷　鼠の卷　（各一冊金五錢　郵稅一錢五厘）

戰後の日本將校　（定價金十五錢　郵稅金二錢）

軍人格言例證　（定價金十二錢　郵稅金二錢）

帝國々難の夢　上中下　（各一冊二十錢　郵稅金二錢）

教育指針　（定價金三十錢　郵稅金四錢）

軍事小說　東洋の大波瀾　（定價金二十錢　郵稅金三錢）

第二版　戰術研究　（定價金二十錢　郵稅金四錢）

各個散兵教練　（定價金八錢　郵稅金二錢）

内外百傑士　定價金十五錢　郵稅一錢五厘

朝鮮半島の天然と人　定價金廿四錢　郵稅金二錢

清國動亂史　前編　定價金十三錢　郵稅金二錢

清韓兩國地圖　定價金四十錢　郵稅金一錢五厘

假備築城　定價一圓五十錢　郵稅金十二錢

國漢文教程　上下　定價金卅四錢　定價金三十錢　郵稅各金八錢

日本歷史教程　定價金十錢　郵稅金四錢

地理學教程　定價金十四錢　郵稅金四錢

千九百年改正獨逸野外要務令譯書

武士道　定價金七十錢　郵稅金八錢

陸軍志願者必携　定價金二十錢　郵稅金四錢

軍人懷中日記　定價金十五錢　郵稅金四錢

徵兵適齡者必携　定價金七錢　郵稅金二錢

歩兵野外演習教育　定價金三十錢　郵稅金四錢

看護卒教科書　定價金十五錢　郵稅金二錢

給養輯錄　定價金六十錢　郵稅金六錢

新諸條例　定價金卅五錢　郵稅金四錢

兵棋對策　定價五十六錢　郵稅金六錢

經理要領　定價金六十錢　郵稅金四錢

艦船旗表　定價金廿一錢　郵稅金二錢

擔架術教科書　定價金十錢　郵稅金一錢

海權論　定價金壹圓八錢　郵稅金八錢

列次名簿　定價金卅五錢　郵稅金六錢

服制圖解　定價金四十錢　郵稅金四錢

電信符號　定價金八錢　郵稅金二錢

基本戰術適用解義　全六冊　各一冊金五十錢　郵稅金六錢

小部隊之指揮　正價金二十錢　郵稅金四錢

兵要地圖學　正價金十錢　郵稅金二錢

兵卒教科書　正價金十三錢　郵稅金四錢

兵卒學科問答　正價金十錢　郵稅金二錢

野戰砲兵操典草案　正價金十錢　郵稅金二錢

要塞砲兵操典草案　正價金十四錢　郵稅金二錢

野戰砲兵射擊教範草案　正價金八錢　郵稅金二錢

要塞砲兵射擊教範草案　正價金廿五錢　郵稅金二錢

全工作教範　正價金十一錢　郵稅金二錢

野戰砲兵工作教範　正價金六錢　郵稅金二錢

工兵操典第一編　正價金五十八錢　郵稅金八錢

全　第二編　正價金廿八錢　郵稅金六錢

全　第三編　正價金廿五錢　郵稅金四錢

全　第四編　正價金十錢　郵稅金四錢

29
281

全　第七編　（正價金三十錢　郵稅金六錢）

輜重兵操典　（正價金五錢　郵稅金二錢）

陸軍服役條例　（正價金四錢　郵稅金二錢）

陸軍召集條例　（正價金六錢　郵稅金二錢）

全補充條例　（正價金四錢　郵稅金二錢）

五萬分一東京近傍圖　（一枚正價十錢　郵稅金二錢）

勅諭及讀法義解　（正價金四錢　郵稅金二錢）

野外要務令　（正價金十錢　郵稅金四錢）

歩兵射擊教範草案　（正價金十錢　郵稅金二錢）

軍隊内務書　（正價金十三錢　郵稅金二錢）

歩兵操典　（正價金七錢　郵稅金二錢）

衞戍服務規則　（正價二錢五厘　郵稅金二錢）

陸軍刑法　（正價金五錢　郵稅金二錢）

陸軍懲罰令　（正價金二錢　郵稅金二錢）

陸軍禮式　（正價金三錢　郵稅金二錢）

全附錄　（正價金十錢　郵稅金二錢）

馬學教程　（正價金十六錢　郵稅金四錢）

躰操教範　（正價金十錢　郵稅金二錢）

全附錄　（正價金五錢　郵稅金二錢）

劍術教範　（正價金七錢　郵稅金二錢）

歩兵工作教範草案　（正價金六錢　郵稅金二錢）

騎兵操典　（正價金八錢　郵稅金二錢）

馬術教範第一部　（正價金七錢　郵稅金二錢）

全　第二部　（正價金十二錢　郵稅金二錢）

騎兵射擊教範　（正價金九錢　郵稅金二錢）

方眼紙（百枚に付）　正價金八十錢

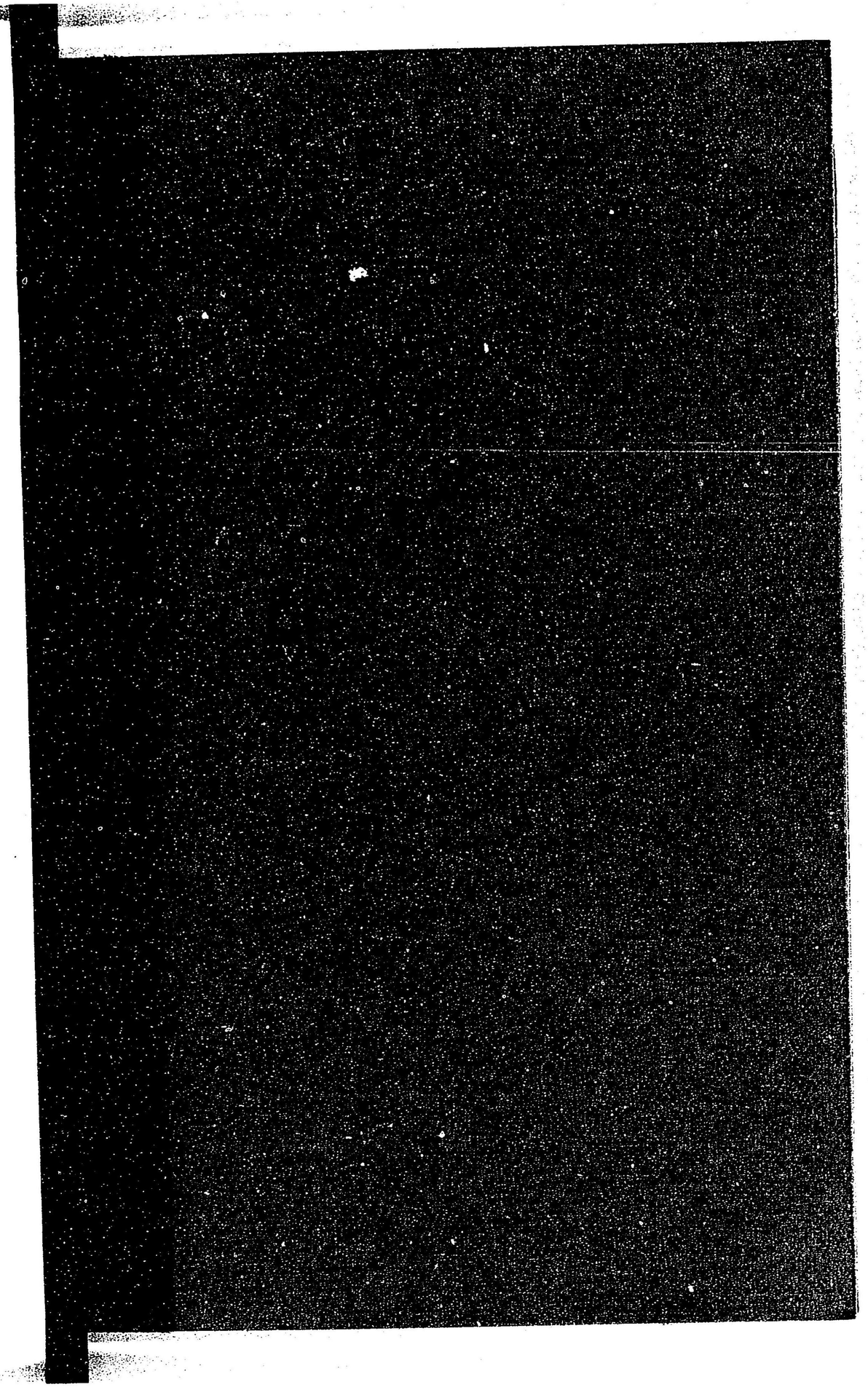
報告紙（同）　正價金廿五錢

同封筒（同）　正價金廿五錢

射擊手簿（歩兵科）　正價金二錢

右之外本社は愛顧諸彦の便宜をはかり兵書に限り内外國何れの發行を不論篤實を旨とし廉價を以て迅速御需に應ずべく候に付多少に不拘御用向仰付被下度候也

東京市赤阪區表町二丁目一番地

兵事雜誌社

兵書出版販賣所